

水面

それからというものの、母はとてつもない勢いで色々なものを捨てていった。祖母が捨てられなかったものを片っ端から捨てていった。一度目の月命日が来る前にもうほとんど捨てていった。片方だけになった。パールのイヤリング、絵葉書教室で描いた作品、「昔お世話になった」という上司から買った幸運を呼ぶらしい牛の置物、間違えて定期購入を契約した視力が良くなるというサプリメント、叔父が小学生の時に作文コンクールで市長賞を獲った時の賞状、死んだ祖父の背広、そういうものを全部全部捨てていった。

祖母が庭中に植えた木も切った。彼女は動物や植物が好きな割に、丁寧に世話をして育てることはあまり得意ではなかった。どこからか種や苗や鉢植えを買ってきて、手入れのしやすさや日当たりも考えずに空いているところに植えてしまうのが常だった。白椿に百日紅、花木木に木蓮。花の咲くのはそのくらい。山桜桃梅に無花果、柿に蠟梅、ブルーベリーにブラックベリー。実がなるのはそのくらい。植物に詳しいわけでもなければまめなわけでもない祖母が植えた木々は、少し知識がある人がみればひどい配置で並んでいるのだろうけれど、緑は意外とたくましいもので不本意な場所に置かれようと天して世話をされなからうと花を咲かせてしまったりするものであった。ただ、綺麗に花を咲かせたり、上手に実がなったりすることはもちろん難しい。放っているうちに見たことがないほどの大木になった枇杷の木は、枝を空に向かって伸ばしすぎたがゆえに人の手が届かないところにしか実がならない。熟れたことに気づいて何とかしてもごうとするころには、カラスが先についてしまっている。そもそも成長しすぎて、枝葉に栄養を行きわたらせるので精一杯なのか、ほとんど実がならない年が多か

った。けれど一度だけ細い枝がしなりそうなほど実をつけた年がある。あまりにも実がならないし、枇杷の葉は毛虫が付きやすいので切つてやろうか、と叔父と祖母が枇杷の木の下の相談をした翌年のことだったそうだ。これが家族の間では、話を聞いた枇杷の木が切られてしまうと感じて頑張って実をつけたんだらう、追い詰められたら何でもできるもんだね、という笑い話になっている。しかし、豊作だった次の年にはまた全く実をつけなくなったので、憎たらしい木だと祖母は言っていた。今日は母が呼んだ植木屋が来て、そんな枇杷の木が今まさに根元から伐採されようとしている。今日は祖母の一度目の月命日だ。

*

「その奥もこちらも全部切ってしまったていいです」
チェーンソーの騒音に負けじと、母が大声で植木屋に指示を出している。足元にはすでに切り倒された百日紅の木がごろんと並べられている。滑らかな木肌は土の上に投げ出され、もう少し待てば花を咲かせていただろう。これは叔父が生まれた時に植えたものだそうで、それを切ってしまうのはさすがに縁起が悪いのではないかと母に告げると「だって食べられないじゃない」と一蹴された。

枇杷の胴体の真ん中に刺さった電ノコの振動が、離れているはずの私の身体を直接揺さぶっている。背の伸びた雑草を刈ったあとの庭は青臭い空気に包まれていた。

「そろそろ危ないぞー」

空気を震わせていたチェーンソーの音が止まり、植木屋は斧を取り出した。あとは少しずつ刃を入れながら、幹

を倒すのだろう。五月晴れ、日焼けした植木屋の腕が斧を振り上げる。重力を借りながら幹の割れ目へと振り下ろす。振り上げる、振り下ろす。それが繰り返される。刃が打ち込まれる鈍い音を揺さぶられ、胸と腹の間にぐっと力が入る。大丈夫。切り倒されるのは、枇杷の木だ。

「お母さん、ずっと日に当たっていると疲れるでしょう。中へ入って軽くお昼でも食べない？」

五月に入ったばかりとはいえ、この晴天じゃあ外にずっといると日差しが辛くなってくる。それにもう昼前だ。

「いいの。ここで見ているから」

一緒に屋内で休憩することを提案したのだが、あつさり断られてしまった。母は朝からこの庭が空っぽになっていく様子を眺めている。

「じゃあ私お昼の準備でもしてくるから。できたらあがつておいでよ」

再び始まったチェーンソーにかき消されて聞こえなかったのか、聞こえなければ何も言わなかったのかは分からないが、これといった返事のない母を残して庭を後にする。この様子じゃ、一人だとご飯も食べずに過ごすだろうから、休みを取ってきてよかった。通夜と葬儀はもろろん、初七日にも一応有休を使って帰ってきている。就職を機に一人暮らしを始めてからというもの、車で三十分ほどしか離れていないのにあまり実家に帰ることもなかったけれど、祖母が亡くなってからはこまめに母の顔を見に来ている。もう長くないと言われてからが長かった祖母の最期、心の準備をする時間はたっぷりあったかもしれないが、喪失に身構え続けるのも体力を使うものだ。あれから一か月経って、母は少し痩せた気がした。

母屋の玄関から庭へと続く道を一人戻る。脇に植えられた南天は、日陰になっているからなのかいまち成長していない。剪定されずに伸び放題になった隣のツゲの木がのせいだろうか。本当は生垣なんかに使われるはずだけど、きつと何も考えず数本だけ買ってきたのだろうか。なという植え方をされている。偽物みたいな光沢のあるツゲの葉も、丸い形に整えてやればそれなりに綺麗なのに。

「彩香ちゃん、お帰り。もう庭は終わり？」

後ろから声がかかって振り向くと、勝手口から出て木田であろう叔父が大きな鍋を持って立っている。

「うん。お母さんはまだ見てる。私はお昼でも作ろうかなと思つて」

いいね、と柔らかな笑みを湛えてうなずく。納屋から大きな新品の鍋を見つけたから、これで素麺でも茹でたらどうか、と。叔父は愛想がいい人だ。

「ありがとう。使わせてもらおうかな」

アルミでできた両手鍋は想像よりもずっと軽かった。空調のない納屋にいたのか、首にかけたタオルで額の汗を拭う。特別老けているわけではない叔父が実年齢より年上に見られやすいのは、この真っ白な髪だろう。若々しい印象を与える黒目がちな瞳と丸みのある輪郭は、私が生まれる前に亡くなった祖父にそっくりだという。その中で白髪だけがなんだか浮いた印象だけれど、私が物心ついたころには既にそうだったはずだ。若白髪は苦勞の証拠だと聞いたことがあるが、彼は確かに苦勞したのだろう。大学を卒業後働きに出てすぐに実の父を亡くした。その時すぐに遠方の就職先を辞めて帰ってきて祖母を支えた、というのが祖母の自慢話の一つだった。

「台所にお素麺あったかな」

「どうだろう。香苗のことだから買つてるんじゃないかな」

使えそうなもの、自分がいいと思つたものはとりあえず買うという祖母の癖はしっかりと母に遺伝して、我が家は食料のストックが尽きない。今度は自分が庭を見に行くと叔父に礼を言つて、台所へと向かう。

家の中は日差しがないというだけで幾分かひんやりとして心地よかつた。古い家だから時々廊下がぎつと鳴る。昔祖母が主に使っていた一階の台所は、彼女が入院しがちになってからあまり使われた形跡がない。数年前に賞味期限が切れた調味料などが棚から出てくることもある。つまみをひねってみるとコンロ周りには問題なく使えるうなので、ここで素麺を茹でてしまおう。お昼を食べるのであろう仏間は同じ一階なのでその方が都合がいい。

持ってきた鍋に水を一杯に入れて火にかける。お盆がないことに気づいて、台所の中を探すが見つからない。もしかしたら、ともはや物置と化した祖父の書齋を覗いてみる。山に面した部屋だから少し湿度が高く、窓からもあまり光が入らない。乱雑に積まれた本や書類の中には、母と叔父が子供だった時の持ち物であろう楽譜や本が紛れている。その中に一枚の写真を見つけた。裏側には日付が示されている。

S&G 5 14

これを見る限り、母と叔父が小学生くらいの時の写真だ。きつと入学か何かの記念で写真館で撮ってもらったのだろう。まだ制服が体に馴染んでいないように見える。後列には祖父と祖母、前列には今と同じ柔らかな顔立ちの叔父が、その隣には睨むような目つきの少女、母が座

っていた。もともと、視力が悪いので目を細めているだけで、睨んでいるわけではないということを私は知っているのだが。

机の上には他にも、母たちが子どもだった時代のものであろう本などが置いてある。祖母はなんでも大切にとって置くというよりも捨てられないままほとんどん物が増えていくタイプの人だった。だから、取ってあるからといって丁寧に扱われているわけでもなければ、居場所を把握してすらいもないことも多々あったが、大切に保管されているものがいくつもあった。額に入れて飾られている成績優秀者の表彰状はその一つで、叔父が高校生の時にもらったものだ。役所に出す重要な書類やなどもしばしば失くしてしまう祖母が、額に入れて何かを飾るなんてことは滅多にない。実際、叔父は祖母の自慢だったのは確かである。一人目の子どもで長男だということもあるだろうが、アルバムには叔父の写真のほうが多い。たいていの写真で叔父はカメラに向かってにっこりと微笑み、母は意図的ではないにしろむくれているように見える。どうしても機嫌が悪そうに見えてしまう一重でつり目という私の目は母と同じだ。

「可愛げがない」

私がよく母に言われた言葉。昔はそういう顔なんだから仕方ないじゃないかといちいち憤っていたが、大人になるにつれて母は自分が言われたことを知っているだけなんだと気づいた。そして母は私に対してそれを言っているというよりも自分自身に言っているんだということにも。でもそんなことを子どもたちは理解できるわけがないことも、自分が一番よく分かっていただろうに。

母が子供時代怒られるときの理由はたいてい、片付けができないことか忘れ物や失くし物が多いことか何をし

ても不器用なことだったという。全部母が祖母に似ているところでもある。

私が県外の四年制大学の文学部へ進学したいと相談した時、母は「無理して四大じゃなくても」と言った。これも母が言われたことと同じ。叔父は関西の大学へ下宿を借りて進学したのに対して、文学部に入りたかった母はそれを諦めて地元の短大へ進んだ。

「あなたは不器用だから手に職をつけなさい」

祖母なりの愛情だったのかもしれない。でも母はそうは受け取らなかった。何が愛かを決めるのは愛を注いだ者じゃない。

欲しいおもちゃを自分だけ買ってもらえなかったとか、おさがりばかり着せられるとか、そういうことで小さな子どもは簡単に傷つくことができる。けれど、妥協や我慢を覚えた十八歳の少女が、選択肢を奪われたことに絶望できたのはもう少し大人になってからのことだった。私と母は血のつながりはあれど別々の人間だ。だから考えること全てがはわかるわけではないが、私がかつての自分と同じ立場で自分が取り上げられたものを手に入れようとする人間を見たら、それが我が子だとして、果たして素直にそれを喜ぶことができるのだろうか。断言する自信はない。

*

「お湯を火にかけてきたんだった」

手に取ったアルバムを机上に置きながらそう独り言つと、カーテンから差し込む光の中で埃が舞った。

台所へ戻るともうお湯が沸騰しかけていたので、慌てて素麺の袋を開ける。ぐらぐらと煮え立つ鍋の上だけ、

空間がゆらゆらと揺らいで溶けていた。そういえば祖母が入院したのは、こんな風にアスファルトの上に逃げ水が表れる夏、去年の八月のことだっただろうか。園ころ物忘れが激しくなってきた祖母だったが、まだ普通に日常生活を送ることができていた。しかし、元々患っていた糖尿病が悪くなり、入院生活が始まると一気にそれが悪化した。認知症の診断が出て、要介護1に認定されるまでそう時間はかからなかった。母が祖母の病室を訪れた際に必ずと言って口にする言葉があった。

「兄さんじゃなくてごめんね」

本当に申し訳なさそうなわけでもなく、厭味つたらしいわけでもなく、何の感情も籠っていないさそうな温度のないうい方だった。祖母の趣味だった絵葉書の道具や着替えなんかを渡すために、こまめに見舞いに行っては毎度その言葉を繰り返した。

「いいのよ。あの子が仕事で忙しいの知ってるから」

それに対する祖母の答えはいつもこんな感じだった。多分、母が心の片隅で期待していたのとは違うものだ。

刺激のない入院生活のせい、二月に入った頃から次第に祖母は家族の名前も曖昧になり始めた。私と母を混同したり、私の従兄を叔父と間違えるようになった。

がくと体調が崩れた三月のこと、母と私が病室にいるところへ叔父が後から合流した。彼を見て祖母はぼつりとおぶやいた。

「お父さん」

ついに叔父のことを祖父だと思っようになったのだ。彼女の頭の中で夫はまだ生きています。

「お母さん、これは兄さんよ」

母がそういうと祖母は少し黙った後にこう答えた。

「何言ってるの。あの子はもう死んじゃったじゃない」

はつきりとそう言ったのだ。

「お母さん、じゃあ私は。私は誰だか分かる？」
母は矢継ぎ早にそう尋ねた。

「分かるに決まってるじゃない。小百合でしょう」
なぜ祖母は失いたくないはずの溺愛していた息子を死んだと思ひ込み、娘のことははつきりと覚えていたのだらうか。夢の中でも全てが思い通りにいくわけではないのだらうか。母が心がない謝罪をし続けたのは彼女なりの復讐なのだらうか。祖母の答えを聞いた時に母は一体どんな顔をしていたのか。私だったら多分――

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

煮えたぎる鍋の前で考え事をしていたからか、頭がぼうつとしていたが、タイマーの音でふつと我に返る。危うく茹ですぎてしまうところだった。大きめのザルに素麺をあげて、氷を一掬い馴染ませる。母と叔父を呼びに行かなければと思うと、タイミングよく叔父が台所へやってきた。

「何か手伝うことはある？」

「ううん。もう茹で終わったから。お母さんと呼んできてもらえる？」

「わかったよ」

気づかないうちに庭のチェーンソーは鳴り終わっていた。

*

素麺と取り皿を持って行って仏間で準備をしていると、叔父と母が外から戻ってきた。

「おかえり」

母しばらく外で日に照らされたからか、火照った顔をしていた。最近では五月の頭といってもなかなか気温が高い。祖母が亡くなってから一か月の間で、仏壇には貰い物の線香や蠟燭が匂いが染みついていて、仏壇には貰い物の線香や蠟燭が当分困らない程積まれている。遺影には叔父の結婚式の時に撮った集合写真のものを使った。母は疲れたからかどこかぼうつとした顔をしている。

「お素麺茹でたから食べましょう」
そういうと心ここにあらずといった状態だが、少しずつ麺をすすり始める。

植木屋の人たちはまだ庭で作業をしてくれている。裏山の竹やぶから笹がうちの庭にまで侵食して来ているのだ。笹は繁殖力が強く、放っておくとどんどん地下茎を伸ばすため駆除がとて難しい。しかも周りの植物が育ちにくもなる。他の木々のための地中の養分まで奪ってすくすくと背を伸ばすからだ。

「小百合、疲れたなら少し休んできたほうがいいんじゃないか？」

叔父が心配して尋ねるが母は「大丈夫」とそっけなく答えるだけだ。叔父が母を気にかけてくれるのは、今に始まったことではなく、母が職場に馴染めず体調を崩した時も最初に連絡を寄こしてくれたのは彼だった。しかし、母はいつも今と同じように「大丈夫」と言うだけだった。彼女にとつて叔父の、兄の気遣いというのは無条件に受け入れて、喜べるものではなかったのだろう。彼の優しさは、彼が愛を感じながら育ったことの証拠だからだしんとした空気が部屋を流れる。

「百合はすぐひらいちやうわね」
母が突然呟いた。小さな声だけれど、静かな狭い部屋にはよく響いた。

親戚や知り合いが送ってくれた小百合は、もうすでに花卉の先が茶色くなっている。祖母の一番好きな花は百合で、母を小百合と名付けたのも祖母である。

「さすがに病院には持っていけなかったから。母さん喜んでるかしらね」

くぐもつた声でそう続けた。叔父が小さく頷く。愛されているかどうかを決めるのは自分だが、愛されていたかどうかを決められるのも自分だけだ。だから無責任に相手に決断させるようなことをしてはいけないのだ。百合の花は今週中には枯れるだろう。

「すいませーん」

玄関から植木屋が呼ぶ声がある。出てみると、庭の木の伐採があらかた終わったので確認してほしいとのことだった。体調が悪いなら、と止めたが真つ先に母が玄関へと向かった。叔父も後に続き、私も更にそれを追う。

「空っぽだね」

庭を見てそういつた母は、あの時と同じ顔をしている。祖母が「あの子はもう死んじゃったじゃない」といった時。

祖母の容体が急変して亡くなったのは、母一人が病室にいた時だった。彼女はその時も「兄さんじゃなくてごめんね」と謝ったのだろうか。

好き勝手に植えられた植物たちを取り去った庭はがらんとして寂しかったが、前よりも空が広くなった気がした。